校長室だより

令和５年度
１２月１８日
ＮＯ．３５

「１％の可能性を信じれば実現する」ボッチャ体験

今年の読書感想文コンクール課題図書『魔女だったかもしれない わたし』（ｴﾙ・ﾏｸﾆｺﾙ著／櫛田理絵訳　PHP 研究所）という本があります。主人公のアディは自閉傾向があり、少し変わっていると思われている女の子です。授業で魔女狩りの話を聞き、それについて調べると、人とちょっと違うということだけで「魔女」にされ、その町では池に沈められていたという歴史を知ります。そしてアディも、昔なら自分も「魔女」にされていたと思うのでした。さらに何より彼女が怖いと感じたのは、人々が「魔女」と呼ばれた人々に対して、今も悪かったと思っていないことでした。今でこそ障害をもつ人に対して、寛容な世の中にはなってきましたが、昔は、障害によって差別されてきたことが分かります。

１２月３日から９日は障害者週間、４日から１２日は人権週間が設定されています。秦梨小でも、１１月２５日のＰＴＡ秦梨生活文化教室の中で「人権教室」を、さらに１２月１５日には、ロンドンパラリンピック・ボッチャ日本代表選手の加藤啓太氏をはじめ、法務局や人権委員の方をお招きして、「ボッチャ体験教室並びに講演会」を開催しました。講師の加藤氏は、名古屋市生まれ、生後３か月に両腕足の麻痺に加え言語障害を負い、脳性麻痺の重度障害者となりました。けれどそんな境遇でも厳しい訓練を行い、障害は１つの個性であると思うようになったそうです。そして障害がある中で、大学も現役で合格し、会社も興して社長まで行い、パラリンピックにまで出場してしまうという、まさに「１％の可能性を信じれば実現する」のチャレンジ精神で、全てを実現してきたそうです。

ボッチャ体験でも加藤さんは、いくつもスーパーショットを見せてくれました。（ハンディをいただいたこともあり、対戦では代表の子供チームが勝ってしまいましたが･･･）そして私たちと同じように喜んだり、集中するのに気合を入れたりして一緒にボッチャを行い、「失敗したり負けたりしても、怒ったりしないで笑顔だった」と子供が言うように、競技に対するスポーツマンシップも素敵でした。講演でも、聞いている私たちに分かってもらえるよう、ユーモアを交えながら、（通訳さんを通して）一生懸命、お話しする様子からは、私たち以上に、しっかり物事を考え、努力し、そして強く生きていると感じられました。

前述のアディも、みんなとは違う自分の意見をきちんと言い、町の人たちの心を動かしました。みんなと違う意見を、ましてやみんなと違う子が言うことはとても勇気がいることです。いじめ問題でも、「みんなと同じ」ことに流されてしまう人は今でもいますし、大人でも自分が正しく、自分と違う人は正しくないと思う人も少なくありません。けれど、秦梨の子供たちは全員が「体験教室に参加して、障害のある人に対する気持ちは変わった」と答えました。加藤さんの言葉や姿が、子供たちの心や考え方を動かしたといえます。現在も多くの人権課題がありますが、障害のある人を差別せず、困っている人がいたら助けるなど、相手のことを考えて行動できる、秦梨っ子がますます増えるといいと思います。